お染久松

新版歌祭文

座摩社の段

敬白、難波の里の大社、座摩明神の鳥居前、張廻したる一構は、手の筋失物走人、息もすたすたきた濱から、四季の草木の賣買は、花の顔見せ冬籠、新參古參大當り、御馴染御贔屓綱八を、今入れかはりお休と、打つたり舞うたり神樂所の、鈴の音さへ賑へり。參詣群集山家屋の佐四郎は、お百度の緋の數さへ九つ時、瓦屋橋に子がひから、年季重ねて久松が、屋敷廻も勤がら、主の目鏡にあぶら屋の、下人小助と二人連、宮にはお百度うつゝの佐四郎、見るより小助が思案顔、立ちどまつて「アイタ〳〵」土邊に尻餅つくり病と知らぬ久松、「何とした小助殿、怪我はないか」といたはれば、「イヤ怪我はせぬが、昨夜から冷腹で、アイタ〳〵、こりやこれ寒の中に水汲んだおどもり、久三の病で急病ぢや。奉公の身のつらさは、大概な事は押して居れど、かう疝氣が差込んでからは、寸白樣になとかゝらにやならぬ」「ヱヽひよんな事ぢやなう。小倉の屋敷の商銀壹貫五百目、晝までに請取にこいとの御使、霜先の銀、念の爲の

二人連、というて遲なつたら、親方の無調法になる事。いつそ私一人往てこうかい」「そんなら大儀ながらさうして下され、是では中々一足も往かれぬ」「コレ氣をしづめて、茶店でなと待つて居やんせ。エ、丸子持つてきたらよいに。戻に反魂丹買うて來て進ぜうぞや」と、傍輩の氣をかね財布、裏表なき小倉縞、屋敷をさして急ぎ行く。後に小助は山伏の、圍の傍へ小聲になり、「法印どの〳〵」「ヲ、油屋の小助殿か、何ぞ用か」「ヲ、貴樣に銀設けさす事がある。アレあの宮の内で百度參りして居る人は、山家屋の佐四郎といふ銀持、こちの娘のお染樣にきつい惚れやう、それ故にあの願參り、こゝらが貴樣の好い代物。おれがとひ打つて貴樣に祈禱頼ます仕業。今あそこへ往て、あのわろに逢うて咄す中、何もかも筋が知れる。貴樣そこから立聞きして居て、占の奇妙を見せると跡が銀ぢや。鹽梅よう罷つたら二つ山ぢや、合點か」「ムムそんならあのわろが、彼大身代の山家屋ぢやの。うまい〳〵」と法印に、しめし合してよい時分に、小助がさし足さは知らぬ、佐四郎はお百度を、廻り仕舞うて神樂所の、前に平伏し拍手ちよんちよん、「南無座摩大明神、油屋の娘お染を、私が女房に持ちまする樣に、どうぞあつちから惚れまする樣に、なむ神明なむ稲荷なむ八幡、なむ大師遍照金剛、なむ觀世音菩薩」「申し〳〵佐四郎樣ぢやござりませぬか」「ヤ油屋の小助か、わが身やいつの間にこゝへおぢや

つた」「イヤたつた今來て後から、お前のぼやきを聞きました」「聞いたか。エ、面目ない、山家屋の佐四郎ともいはれる者が、戀なればこそコレ此錢ざしを見てたも」「シタリ、百度參とはきつい凝りやう」「イヤ凝つた段ではない、元油屋の家には親どもから、百貫目餘の取りかへ、夫を急に催促ぬはあの娘故、後家のお勝にとうから言込んで結納まで入れてある、それに今日此頃後家が言分には、いかにも上げませうけれど、緣の事は親の儘に無理押にもなりませぬ、あれが心を聞いてからの、何のかのと埒の明かぬ。そこでわが身に槌打たさうと思うて、時々の用無心。イヤ羽織の裏がほしいの、加賀の褌を買ふはの、髭剃の色拂ひまで呑込んで遣つた此山家屋、夫にマア」「おつといふまい、働が鈍いとおつしやるのか。慮外ながら急度働いて居ますぞえ、夫ならこそお前のお望、十分の物九分は埒が明いてある」「ヤア そりや本かいやい」「ほんか嘘か此間の文の返事、かはいらしいお染が筆、爰に持つて居るけれど、さういふお前の請なれば、マアお目に懸けまいわい」「ア、こりや拗強ずとちやつと見せてくれ」「見せたら此働代は」「ハテ此望みが叶うたら、禮はきつと飯櫃形でするわい。マア其文を」「イヤ滅多に代物手放されぬ、當世懸商はあぶない。マア後での禮は禮、先へちつと力付かぬと勢がない。かうせう、此文私が讀んで聞かします程に、よい返事の文句なら、冥加錢を上げさん

せ、えいか。さらば開帳致さうか。ハア何ぢや、ようぞや御文下され嬉しく拜し參らせ候。ソレ嬉しいと書いてあるぞえ。誠に數ならぬ我身に淺からぬ御しんもじの程、身に餘り辱う存じ〻〻。ソレそこで冥加錢」「心得たしなみ銀入から、豆板一つ、「サア〳〵其後は〳〵」「身に餘り辱う存じ〻〻へども、母樣の有る身にて任せぬ譯御座候へば、まづ〳〵御斷り申上げ〻〻」「ヒヤアこりやどうぢや」「サ、、、爰が味ぢや、母親の許しさへ出たら、私はお前に添ひたいといふ事ぢやわいな。又々母樣に尋ね候へば、緣の事はどうなりと、そなたの好いた殿御を持てと御申しなされ候故、それは〳〵嬉しう存じ〻〻とけつかるわい」「エ、忝い。冥加錢、今度ははずんで、二朱一つ」チットしめたと又着服、「さうして後は後は」「嬉しう存じ〻〻へども、何分私はお前がいやにて御座候」「イヤア」「いや〳〵急くまい〳〵。こりや是ちつとした讀みやうぢや、私をお前がいやであらうといふひぞりの文ぢや。其證據は、後に、あなたにも私を御なぶりの事と推し〻〻。ソレ〳〵〳〵、若し又眞實にて候はど、誓文々々、私が事は、ソレ爰が肝心の性根ぢや、今度は一歩ぢや、冥加錢々々々〳〵〳〵『サア遣るわいやい。マア氣がせく、跡を早う聞かせいやい」「誓文々々〳〵、私が事はふつつりと思ひ切り下され候。何の因果にお前の樣な男に」「ヤ何と、其跡はどうぢや〳〵」「サア此跡は、イヤもう聞きなんす

な、跡はほん、やくたいぢや。壹分一つ井戸へ落したと思はんせ」と、聞いて佐四郎はおろおろ顔、お性根取られた鼻紙袋、下地が抜けたさしばかりの、百度參も恨めしき、「申しさう力落したものでもない、お前の戀の邪魔といふは、久松といふ丁稚め、何でもこいつに腐り付いて居ると見えます。尤男はあいつより、ちつとお前が次なれど、肝心の所で喰付かしたら、乘りかへるは知れてある」「サィャイ、おれが背中の骸のずんに、是ほどな疣がある、こいつが前後に振りかはつてあるくらゐなら、恐らく前髪奴には仕負けぬものを、殘念や」と、尻を捻つて無念がる。「イヤ申し物には祈禱といふ事がござります。幸あそこに山伏がある、久松とお娘と緣切をお頼みなされぬか」「ホンニ是は氣が付かなんだ、第一おれが戀が成るか成らぬを見て貰はにやならぬ。シタガ若しひよつと成らぬというたら、又十二文損するのぢや」と、根がしはんぼの安物から、網に罹つた鳥居の前、「占御判墨色相性の考、見て上げませうお這入り」と、呼込まれるをしほにして、はいる佐四郎さしこんだ小助が相槌、「あなたの年は三十一でござりますな」「ムヽ三十一」「當年三十一歲の男、お生れ年が寶永六年己丑、御一代の守本尊は月の二十八日不動明王。性分は火にして則住所より南少し東に當り、水邊に待人あり。女と見えます、こりや色事でござるな」「旦那何ときついかく。成程此旦那大色

事仕でござります」「八卦の面にさう見える。トキニ其許樣は丑の年で、牛の痳た程金銀を持つてござる。此度東に當つて金銀の星が顯れまする、是が其許樣の年頭に當る、卽ち彼金銀の勢で、此女はお手に入る筈ぢやが、爰に一つ障がある。其許樣には背中の骶に、疣が一つあらうがの」「イヤア、サア〳〵見通しぢや〳〵」「サア〳〵なけりやならぬ理ぢや。此疣のある所が惡い。惣體背中に有る疣は背疣というて、只今師走には、或は牛房鰊鰯、何なれかなれ人に物を遣るばつかり、錢銀を取られるばかりで、是まで賴んだ事が、一つも埒が明かぬと見えます」「とんと其通り」「さうあらう。時に又一つ大きな邪魔がある。ハテかはつた物、四角な物ぢやが、坎艮震巽りかんがすかん、兌中斷と取つてだゞほたの兌の卦に當る。人相に取つてはこりや前髮と見えます。彼金星銀星が寄合はうとする中へ、此前髮の眞鍮星が、每晚夜這星になつて邪魔するといふ卦體」「サア夫がけたいでなりませぬ。どうぞ其前髮を」「此法印が行力で祈り殺して進ぜませう。まづ緣結の星祭、こりや其許樣の御家へ參つて致さにやならぬ」「サア夫が第一お賴み申したい」「申さぬ事は聞えぬが、金銀の星を祭るは、同氣相求めるの道理で、金銀の元入が餘程入ります」「サア何ほでも大事ない」「供物は隨分大きな鏡餅十二重、跡は法印が受納致す。さて祈禱の間、酒肴で我等を御馳走なされるがよい。かく申せばとて、手

前が喰ひたい飲みたいではござらぬ、卽ち夫が星樣への御馳走。物をほしがるによつて是星なり。祈禱始に宮の內の福屋で、マアちよつと御神酒上げよかい」「旦那、こりやよござりましよ」と、おだてる太鼓神樂所の、鼓片手に糟禰宜が、「山家屋佐四郎樣、御獻上の神樂が只今上りまし。サアお出でなされませ」「是はいかな、糅てて交ぜてどんちやんと、是もやつぱり今の願、モウ神樣を賴むに及ばぬ。コレ神樂の酒手ぢや、貴樣も御神酒の相伴さすぞ」「イヤ有難いは。さらば福屋で腹存分、禰宜山伏のくらゐ爭ひ。願主樣まづお入」と、鼓よりまづ舌つゞみ、打ちつれ茶屋へ勇み行く。小助はそろ〳〵小戻りし、手招きすれば最前より、待ちかね山仕の浪人者、鳥居の蔭より又一人、是も手合と顏見合せ、三人いつしよに寄りこぞる。中にも勘六氣をせいて、「シテくだんの物は」「コリヤ聲が高い。あの井の內に仕かけて置いた、此鈴木彌忠太、久松めとは仔細あつて意趣のある中、彼奴めを仕くじらす工面は、小助かう〳〵、合點か」「よし〳〵、彌忠太樣は勘六と、福屋で飲んでござりませ。前髮めが戻るを待つて、手工合首尾よう〳〵」と、耳から耳へ相談さらり、しめて三人別れ行く。人一盛夢の世や、浮名の端の種油、一人娘と寵愛の、お染が思日に千度、行きつ戻りつ蝶々の、縫の模樣を振袖に、包むとすれど娘氣の、迷ふ心を一筋に、座摩の宮居に步み來る。下女の

お傳が、「申しお染樣、宮の內の茶店で、ちとお休みなされませ。私は此處に張番して、彼人が今でも見えたらコレ斯う」と、いへばお染はほゝ笑みながら、「神のお庭で勿體ない。差合のない時に、顏を見るのが樂み」と、待つ人よりも待たるゝ身、久松はいきせきと、屋敷の用事そこ〳〵に、足元かろく立歸る。お染は見るより、コレ久松樣といはれもせず、「此所に〳〵」と寄添へば、久松も途中の人目、「コレお傳殿、小助殿は見えなんだか」と、いひつゝ邊に氣を付くれば、呑込むお傳が、「申し御寮人樣、わたしやあの綱八の芝居が一切見て參じたい」「ホンニそなたは芝居好、藪入でなけりや行かれぬに、けふは幸ひ勝手に往ておぢや、隨分緩りつとだんないぞや」「ハイ〳〵、そんなら往て參じよ。久松殿もお染樣と、どこぞそこらへ藪入さんせ」と、はづすは猫に鰹木の、氣を通り札鼠木戸、是も忠義と行く跡に、契りし中は詞數、いはず取る手を振放し、「申し御寮人樣、お前樣は追付けえい男お持ちなさるげな。私は下人の事、何とせう、しよ事がない、といて拗强るはやつぱり愚癡。勿體ないお主樣が、是までのお志、眞實冥加なう存じます」と、押下れば摺寄つて、「コレ夫はマア何の事、內では人目があるによつて、久松々々と家來あしらひ、樣といふ字は口の中で、常住消して居るはいの。せめてこんな所でなりと、女房かお染かと、いうてたんのうさしもせず、お前樣の御寮人のと、

獻上向な挨拶は、まだわしが氣を疑うてか。そもや見初めし其日から、エ、こんな事何とかやいひたいけれど、人が見るので何にもいはれぬ。どこぞ人の聞かぬ所で、しつぽりと咄したい。こつちへおぢや」と手を取れば、「さうぢやてゝ茶屋の内もやつぱり人目、どこぞ誓しの隱家」と、覗く八卦のかこひの内、「ヤア誰もないはいの、外から襖は戀の塒、サア此間にちやといの」と、手を引く主從三世相、二世を兼ねたる妹脊鳥、忍び入るこそわりなけれ。神樂の鈴も時移る、ほろ醉機嫌に法印は、とろ〳〵目して鳥居前、「エ、きやつも吝いやつぢや。喰はれもせぬ吸物にたつた酒三銚子、ホンニ端た酒飲まうとて、店を明けたは不用心、山伏が物盜まれては、見て貰ふ所がない。ヤ、何やらぶつ〳〵呟くやうな、此内に人の聲あるは、ハテ怪しや」と暖簾の内、差覗いて驚り仰天、這入られもせず氣はうはづり、繪馬に上つた一來法師、立ちずくみになつて居る所へ、いきせき走つて下男、「コレ〳〵法印樣、一つ見て貰ひたい」と、入らんとすれば、「ア、コレ、今内へ這入ると水火木金亂騷ぎ、木火土金すゐをきかせいやい。八卦なら爰でもつい見てやる、失物か走りか、心中がかつた者なら、奇妙に所を指いて見せるぞ」「イヤそんな物ぢやない、こちの旦那山家屋の佐四郎樣が、今朝から今にお歸りなされぬ」「ムムそれか。よいは、此山伏が行力を以て、たつた今こゝへ天降らして進ぜる、佐四郎さま〳〵」

「ヲ、法印坊そこにか」と、出てくる佐四郎にすれ違ひ、そつと後の襖から、鳥居の中へ行く二人、戀しいお染と夢にも知らず、「サア〳〵〳〵一時も早う星祭、是から直に手前が宅へ」「そんなら參ろか。イヤ待つたり、肝心の商賣道具、持參致そ」と圍の内、「ヤア、テモ素早い奴、もう逃げをつた。さては今のが彼前髪めであつたな、ようぼん代を喰逃に仕をつたな。よいよい、此意趣返はたつた今、お染がお前に厭く樣に、祈伏せるは我數珠先。さんげ〳〵六根大聖南無不動明王〳〵。なんぼうに見つとむなうても、男はれこもち喰はねば立たぬ、身代よしの山家屋で、腥料理喰ひ次第、蒸菓子羊羹貰めかけ〳〵、榮耀のありたけえいさらさ〳〵、さしものお娘も喰につき、魂の返るは今の中」と、いさんで打連れ歸りける。南の辻に人立し、喧嘩々〳〵々と騷ぐ聲、驚き出づる久松お染、下女もとつかは久三の小助、一所に落合ふ床几の上。喧嘩は振物國侍、相手は町人胸ぐら取られ、引立てられてもひるまぬ男、「こりや何とさつしやります」「何ととは素町人め、武士の足を泥脚で踏みながら、御免ともぬかさぬ慮外者め」「サアえいわいな、慮外ならあやまる分、マアこゝを放さんせ。踏んだはおれが脚、踏まれたはこな樣が脚、武士ぢや町人ぢやてゝ脚に違はあるまい。そんなこつき喰ふ男ぢやない、聞かぬというてどうさある。お太刀ひねくつたとて、滅多に切れるものぢやない。人そばえせずとお侍、

どうなと召され」とすり寄る體、「エヽおのれしきぶち放すも刀の穢、どうしてくれう」と傍邊、有合ふ財布眉間へぱつしり、ハット驚く久松を、お染が抱きしめ押ゆる袖、氣をもみ裏の裏へ行く。小助がきつと、「コレ申し、あの包は手前の銀財布、斷もおつしやらず、お侍には似合はぬ仕方」「誠に是は心せく儘手前の龕相、眞平々々。なむ三寶少々血が付き申した。幸の井の元」と、清むる穢は薄けれど、包みし惡事すりかへる、手目を見せじと小助が氣配、覆になつて立縞の、財布手早く「コレ久松、此銀は懷へ。お染樣、掛り合になりや惡い。私もお供、サァ〳〵早う」とせり立つる、工の底は白齒のお染、久松早うと手を取つて、せはしい所が結ぶの神、足を早めて立歸る。跡は人たえ宮芝居の、切のめりやすしめやかに、囁く二人が仕濟まし顏、「彌忠太樣首尾は」「ヲヽ件の物は手洗鉢の下にある」「うまい〳〵」と立寄つて、財布取上げ「彌忠太樣、今日の働き代はえ」「ソレ金二兩」「エヽ眉間に疵まで付けられて、たつた是かいな」「サァよいは、其壹貫五百目、どうで小助にも口錢やらにやや聽きをるまい」「そんならふてうはどやでせう、ぐれのこぬ内サァごんせ」と、銀懷へ取納め、連でない顏跡先に、のしのし歩む鳥居の蔭、「盜賊待て」と聲かくる。びつくりしながら騷がぬ顏、「盜賊とは誰が事」「おのれらが事さ」「エヽ何を證據に盜賊とは」「ヤァぬかすまい、今日此方の屋敷にて、油屋の下

人久松に渡せし銀子、子供上りの若いやつ、何とも心元なく、跡より來り窺ひ見るに、おのれ等が騙事。かやうの吟味仕れと、お金役より付け置かれた、岡村金右衛門といふ者だはい。サアおのれ等引つくゝつて屋敷へ連行く、腕を廻せ」と詰めかけられ、「ハテさう見られたら是非がない。成程其銀は騙りましたが、此お侍は通り合して連になつたばつかり、何にも御存じないお方、私一人縄かけて、サアお引きなされませ。サアく」と油斷を見すまし彌忠太が、差したる刀抜打に、肩先ずつぱと金右衛門、同じく抜いて切り結ぶ、両方劣らぬ牛角の早業。彌忠太は八方に眼を配つて、「ソレくそこをと」、聲の助太刀ちからにて、強氣の勘六まくり切り、なぐる刀を受損じ、たじろく所を付け入つて、兩脚薙がれよろくく、うんとのつけに倒れ伏す。勘六は一息ほつと、人や見ぬかと見廻す彌忠太、「勘六どうした」「氣遣ひさんすな、もうとまつた」「ホイ、シテ此捌きはどうせう」「ハテどうというて高ぶけり」「ヲヽ身どもとても此處には居られぬ。ドレ其銀を此方へ」「彌忠太樣、お前此銀取ると笠の臺が飛ぶぞえ。藏屋敷の侍をばらしたからは、どうでおりや遁れぬ命、とても助からぬからは、何もかも勘六が引受けて、こな樣の名は出さぬ。づきが廻らぬ内早往かんせくく」「尤、エヽあつぱれ男ぢや、緣あらば重ねて」「細言いはずと早うくく」「ヲヽさらばくく」と別るゝ跡、納めた勘六そろくく

と、死骸の傍へ立寄つて、「首尾よう行たぞ」「ヲヽもうよごんすか」と、むつくと起きる體は血まぶれ。「勘六殿、今のでよかつたか」「よいとも〳〵、物した物を又こつちへ、是も貴樣の切られ樣が上手なから、何ぼ切つても疵痛せぬ、紀州の源藏大儀でごんした」「ヲヽサそこらをさす物かいやい」「シタガ餘り拍子にかゝつて、よつ程の疵、いたみやせぬか」「何のいやい、もう最前吉野丸付け置いた。夫を知らずに今の侍めが、逃げていにをつたざまゝ。コリヤ此位の疵は、たつた一付で直るはいやい。はなたれめが」「それ酒代の一兩」「忝い、サア〳〵是からこちの商賣、紀州源藏樣お歸りぢや」「アヽコリヤ立前所ぢやない。アレもう芝居が果てる、人の見ぬ間に早う行け」チョン〳〵幕際綱八の、切狂言の果太鼓、音に紛れて三重。

野崎村の段

年の内に春を迎へて初梅の、花も時しる野崎村、久作といふ小百姓、せはしき中に女房は、萬事限りの膈病、娘おみつが介抱も、心一ぱい二親に、孝行臼の石よりも、堅い行儀の爪はづれ、在所に惜しき育かや。冬編笠も燻り三味線、つぼもすまたの彈語、「御評判の繁太夫ぶし、本は上下綴本で六文、お夏清十郎の道行々々。あづまからげのかいしよなき、こんな形でも五里

十里」「通らしやれ。母様の煩で三味線も耳へは入らぬ、手の隙がない通つて下され」「清十郎涙ぐみ、お夏が手を取り顔打ながめ、同じ戀とはいひながら、お主の娘を連れて退く、是より上の罪もなし」「ォ、聞きとむない、通りや〳〵」といふ聲に、久作は納戸を出で、「大阪ではやる繁太夫ぶし、そなたにも聞かしたけれど、病人の氣に構はう。本なと讀んで氣晴し仕や」と、義理ある中も子を思ふ、惠は厚き古合羽の、煙草入からこつて〳〵、錢取出して、「ドレ一冊買ひませう。ナンヂャ、お夏清十郎、道行戀の濡草鞋。コレ見や、此お夏は手代と念頃して、姫路を駈落する道行。同じ娘でも世は樣々、纐三里の大坂へ、芝居一つ見にも行かず、今度の大病から目の見えぬばゞの介抱、達者なおれが喰物まで、其樣に氣を付けてたもる孝行娘、若し勞れでも出ようかと、おりや夫を案じるはいなう」「ヲ勿體ない事言はしやんす、煩うて居さんす母樣より、健なお前のお心苦勞、せめてもの手助けと思うたばかり、其樣な事苦にやんで、煩でも出ようかと、私や夫が悲しうござんす」「ハテわつけもない、したが百日と限のあるばゞが大病、案じるも無理ではない。が、玄庵殿の加減の藥で、今朝から末の椀蓋にお湯が二はい通つた。見かけに寄らぬ巧者な醫者殿。ヤ　幸今日は日和もよし、久松の親方殿へ歳暮の禮に往て來る程に、隨分ばゞに氣をつきや」と、いひつゝ脚絆草鞋がけ、紐引きしむ

れば、「ヲ、父様とした事が、此短い日にモウ晝過、明日の事になさんせいで」「何のいやい。年こそ寄つたれ此足に覺えがある、一時三里犬走り、日暮までには戻つてくる。歳暮の祝儀はコレコレ此藥苞、山の芋は鱣になる、久松の年が明いたらば、われは又お内儀になる。夫樂みによう留守せい。ドリャ往て來う」と身拵へ、藥苞肩にヤえいとこな、表へ出でしが立ちどまり、「取分け今年は早う咲いた此梅、何より角よりよい土産」と、春待顔に咲く花を、手折つて苞に一枝を、添へてひよか〳〵野崎村、跡に見なして出でて行く。影見送りて久松が、事のみ思ひ兎や角と、胸に一ぱい半分の、水量り込む藥鍋、一へぎ入れる生姜より、辛い面つき久三の小助、久松引連れ入口から、「久作内に居やるか」と、づつと這入ればおみつは嬉しく、「オ、久松様、ようマア戻つて下さんした。定めてあなたは送りのお方、お茶よ煙草」と嬉しさに、立つたり居たり氣もそゞろ。「エ、やかましいわい。うそ穢い在所の茶飲みにはこぬ。コリャ追從せず」と聞いて置けよ。此久松めが親方の銀壹貫五百日お山狂にちよろまかしたによつて、今日連れて來たはな。久作と三つがなわで詮議するのぢや、親父を出せ、出せ〳〵〳〵」と辰巳上。身の誤に久松が、差俯いて詞さへ、ないには若しやと思ひながら、「御腹立はお道理ながら、何のマア久松様に限つて、よもやさうした事はあるまい、定めて是は何ぞの間違、覺がなくば

ないといふ、ツィ言譯をして下さんせいな」「ハ、べるは嗜るは。コリヤヤイ、天窓こそ前髪なれ、其素早さ、傍輩には辭宜もなしに、取つて置きのお娘まで、此跡はいはずにこます、裾貧乏のはつた行過丁稚め、首綱のかゝる事、言譯に如才があろかい。小倉の屋敷へ請取りに往た爲替の銀、御役人から改めて渡つたは正眞、内へ戻つて明けた所がわやひんの胴脈、道の間ですりかへた品玉の大夫、早喉久松でございます、ハリトウ〳〵。白眼剝くは無念なか、無念なら銀立てるか、有るまいがな。サア久作は何所に居る、出さらずば引出さう」と、駈入る袂を久松引きとめ、「成程、銀をすりかへられたは皆私が無調法、身の明りの立つまでは、在所へ行けと後室樣の結構な御了簡、それをそなたが」「ヤイ〳〵〳〵何吐すぞい。そりやわれが勝手了簡の聞損ひ、おれには此詮議仕ぬいてこいと、内證で後家御の言付、ぢやによつてめつきしやつきするが何ぢや、ひんこめ出され」と大聲を、おみつが押へて、「コレ申し、御尤でございすけれど、奥の病人に好事がましう聞かしましては病氣の障、もそつと靜に」「イヤ高ういふのぢや〳〵。是程わめくに聞耳潰すは、親仁もぐるの仕事ぢやな」「イエ父樣はあなたの方へ、歳暮の禮に往かれました。どうして道が違うた事、若持病やなど發りはせぬか」と、外も氣がかり病架への聞えも氣づかひ、久松が身の言譯に差込んだ、癪を覺えるばかりなり。弱み

へ付込む悪者根性、「大阪へ往たが定なら、否ながら道で逢ふ筈、そんなてれんぬかすなやい。ドレもう家捜と出かけざなるまい、邪魔ひろぐな」とおみつを引退け、取付く久松面倒なと、踏むやら蹴るやら無法の打擲、詮方もなき折からに、道引返しいつきせき、戻る久作駈け入つて、小助を引退け突飛し、「留主の間へ來てわつぱさつぱ、樣子に寄つて了簡せぬぞ」「ヲよう戻つて下さんした。最前から久松樣をな」「ヲ、よいてや、久作が戻るからは、娘もじつと落付け」と、納める程猶業腹沸し、「大まいの銀引負した其ばりめ、詮議に來た小助は親方の代、夫を又わりや何で投げたのぢや」「是は迷惑な、ひばり骨見る樣な手で、血氣なこなた投げたのではない、怪我のはずみ。出端の曲途で道が違うて、留守の間へ大阪から息子が來たぞやと、若い者どもの知らしてくれたで、行き戻り五六里を助かつた。德安堤引返して戻つたが、そんなら何か、其引負で久松は戻つたのか。ア、夫聞いてマア落付いた。マア〳〵何角は指置いて、傍輩衆の御世話であらうと、蔭ながら言うてばつかり居ますはいの。寒い時分によう連立つて來て下さつたなう。ソレおみつよ、茶なと汲まんかいやい」「コリヤ納めな〳〵。わりや夢に見た事もあるまいが、壹貫五百目といふ銀高、子の科は親にかゝる、銀立てるか、但しは又願はうか、二つ一つの返答聞こはい」「ハテよいわいの。其樣に息せいはるは大きな毒、兎角人間

は心長う持つのが藥ぢや。ヤ其藥で思ひ出した、土産にせうと思うた此山の芋をとろゝにして、出來合の麥飯を進ぜうかい」「置けやい。見せかけばかりの正直倒し、麥飯の、とろゝのと、ぬらくらとは吐させぬ、あんだらくさい」と蹴ちらず藁苞、破れてぐわらりと出る丁銀。「ソレ久松が引負の銀、渡したならば言分あるまい、とつとと持つていなしやれ」と、聞いておみつも久松も、思ひがけなき驚に、小助もぎよつと仕ながらも、包改め、「こりや正眞ぢや、テモ出にくい所からよう出たな。吹きや飛ぶ樣な内のざまで、泥龜三つで一貫五百目、請取るからは言分ないわい」「ヲヽそつちに言分がなうても、こつちにぐつと言分がある、と言ふも古いものぢや。是まで御世話になつた親方樣、御恩こそあれ恨はなけれど、人に欺され取られた銀、引負の、惡遣ひのと、名を付けて貰うては世間が濟まぬ、というて無理隙取るではない、親が暫く預かつて置く程に、此通いうたがよい。モウ二十年おれが若いと、わごれにはぐつと馳走もあれど、入らざる殺生。サア〳〵早う往んだがよかろ」と、言はれてどうやら底氣味惡く、「銀の出入さへ濟んで仕舞や、外の事はお構ない。さらばお暇申さう」と、打違取出し捻込み押込み、「ハヽア命冥加な一貫五百目、内へいんで出した所が、蔓になつて居やせまいか」「ハテ仇口をきかずとも、足元の明い中」「ヲいないぢや。銀こそは主の物、何の其、おれがでにおれ

がかたげて、おれが足でおれが歩行いて、おれが體がいぬるに、ぐつとも言分ない筈」と、へらず口してとつぱ門口柱で天窓、ァいたしこ助は足早に、大阪の方へ立歸る。おみつは親の氣を兼ねて、いらへ無ければ久松すり寄り、「此身の手詰は遁れても、此お暮で餘程の銀、跡でお前の御難儀には」「ハテおれぢやとて、相應のかくまひはせまいものか、始末してためたあの銀は、黒谷の方丈へ上げる冥加銀、氣遣仕やんな、まんざらあればかりでもないわいの。改めていふではなけれど、末はわが身とひとつにする約束で、此おみつはばゞが連子、あれも否でもないさうなり、折もあらば親方殿へ、暇の事を願はうと思うて居たが、是がほんのもつけ重寶、もう大阪へいなしはせぬ。早却なれど日柄もよし、今日祝言の盃さすぞ。何とおみつよ嬉しいか〳〵〳〵。我等は又天窓を丸め、參り下向に打かゞらうと、賴み寺へ願うて、袈裟も衣もちやんと請けて置いたてや。幸ひ餅は搗いてあり、酒も組重も正月前で用意はしてある。サアサア早う拵らや」と、藪から棒をつゞかけた、親の詞に吐胸の久松、知らぬ娘は嬉しいやら、又恥づかしき殿まうけ、顏は上氣の茜裏、袂くはへるおぼこさを、見るに付けても今更に、否應ならぬ親の前、急に思案も出の口の、壁にいの字をかき一重、裏の病架に咳嗽く聲、「ホンニこちらの事に取込んで、定めて婆が淋しからう。久しぶりで久松にも逢はして、此事を聞か

したら藥より利目がよい。ハテ俯いてばかり居ずと、おみつ、鱠も刻んでおけ。久松おぢや」と先に立ち、悅びいさむ親の氣を、知つて破らぬ間合紙、襖引立て入りにけり。跡に娘は氣もいそ〳〵、「日頃の願が叶うたも、天神樣や觀音樣、第一は親のお蔭。エ、こんな事なら今朝あたり、髮も結うて置かうもの、鐵漿の付樣挨拶も、どういうて能かろやら」覺束なます拵も、祝ふ大根の友白髮、末ながたなと氣もいさみ、手元も輕うちよき〳〵〳〵、切つても切れぬ戀衣や、本の白地をなまなかに、お染は思ひ久松が、跡をしたうて野崎村、堤傳に漸〳〵と、梅を目當に軒のつま、供のおよしが聲高に、「申し御寮人樣、かの人に逢はうばかり、寒い時分の野崎參、今船の上り場で、敎へてもらうた目じるしの此梅、大かた此所でござりませうぞえ」「ヲ、もそつと靜にいやいなう。久松に逢ひたさに、來事は來ても在所の事、目立つては氣の毒。そなたは船へ、早う〳〵」と、追ひやり〳〵、立寄りながら越えかぬる、戀の峠の敷居高く、「物申、お賴み申しませう」と、いふもこはぐ〳〵暖簾越、「百姓の內へ改つた、用があるなら這入らしやんせ」「ハイ〳〵、率爾ながら久作樣は內方でござんすかえ。左樣なら大阪から、久松といふ人が、今日戻つて見えた筈、ちよつと逢はして下さんせ」と、いふ詞つき形かたち、常々聞いた油屋の、さてはお染と惚氣の初物、胸はもや〳〵かき交鱠、まな板押しやり戸口に

立寄り、「見れば見る程エ、美しい。あた可愛らしい其顔で、久松様に逢はしてくれ。そんなお方はこちや知らぬ、餘所を尋ねて見やしやんせ。阿呆らしい」と腹立聲。心付かねば、「ホンニまあ、何ぞ土産と思うても急な事。コレ〳〵女子衆、さもしけれども是なりと」と、夢にも夫としら玉か、露を袱紗に包の儘、差出せば、「こりや何ぢやえ、大所の御窶人様、様々々と言はれても、心が至らぬ、置かしやんせ。在所の女と侮つてか、欲しくばお前にやるはいな」と、やら腹立に門口へ、ほればほどけてばら〳〵と、草に露銀芥子人形、微塵に香箱割れ出した、中へつか〳〵親子連、出てくる久作、「どうぢや、鱠は出來たであらう。さて祝言の事婆が聞いてきつい悦。ぢやが年は寄るまいもの、さつきのやつさもつさで、取上したか頭痛もする、いかう肩がつかへて來た。アヽ、橙の數は爭はれぬものぢやはいの」「左様ならそろ〳〵私が揉んで上げませうか」「ソリヤ久松忝い。老いては子に隨へぢや、孝行にかたみ恨のない様に、おみつよ、三里をするてくれ」「アイ〳〵、そんなら風の來ぬ様に」と、何がな表へ當り眼、門の戸ぴつしやりさし艾、燃ゆる思は娘氣の、細き線香に立つ煙、「サア〳〵親子ぢやとて遠慮はない、艾も痃癖も大摑にやつてくれ」「アイ〳〵、きつう痞へてござりますぞえ」「さうであらう〳〵。次手に七九をやつてたも。オツトこたへるぞ〳〵」「サア居るますぞえ」「アツヽア

ツ、えらいぞ〳〵。あすが日死なうと、火葬は止にして貰ひませう。丈夫に見えてももう古家、屋根もねだもこりや一時に割普請ぢや。アツ、、、、」「ヲ、父様の仰山な、皮切は仕舞でござんす。ホンニ風が當ると思や、誰ぢや表を明けたさうな、しめて參じよ」と立つを引とめ、「ハテよいはいの、晝中に欝とし い。ナウ久松々々々々、コリヤ久松、餘所見ばかり仕て居ずと、しか〳〵と揉まぬかいの」「サア餘所見はせぬけれど、エ、覗くが悪い。折が悪い、悪い〳〵悪い」と目顔の仕かた。「ヤ悪いの、覗くのと、足に灸こそすゑてゐれ、何所もおみつは覗きはせぬ」「サア、アノ悪いと言ひましたは、慥今日は瘟疫日、夫に灸は悪い、悪い〳〵というたのでござりまする」「エ、愚痴な事を。此様に達者なは、ちよこ〳〵灸すゑ、作りをする、そこで久作、アツ、、、エ、何ぢやはい、わがみ達も、達者な様に灸でもすゑるのが、おいらへの孝行ぢやぞや」「ヲさうでござんすとも、久松様には振袖の美しい持病があつて、招いたり、呼出したり、悪てらしい、アノ病ひづらが這入らぬ様に、敷の上へ大きうしてすゑて置きたい」「コレおみつ殿、振袖の、持病のと、色々の耳こすり、はしたない事聞いてはゐぬぞや」「ホ、、、、變つた事がお氣に障つた」「ヲ、障らいぢや」「こりやをかしい、其譯聞くぞえ」「いふぞや」と、我を忘れて詞を、外に聞く身の氣の毒さ、振の肌著に玉の汗。久作も持てあつかひ、「ア

アコリヤ肩も足もひり〳〵するがな〳〵。まだ祝言もせぬ先から、女夫いさかひの取越かい。炎業のかはり、喧嘩の行司さすのかいやい。二人ながら嗜め〳〵」「イエ〳〵構うて下さんすな、今の様な愛想づかしも、病ひづらめがいはしくつさる」「何をいふやら、モウ〳〵、兩方ともおれが貰ひぢや。ヨ、、中直が直に取結の盃、髪も結うたり、鐵漿もつけたり、湯もつかうて花嫁御を、コリヤ作つて置け」と打笑ひ、無理に納戸へ連れて行く。其間遲しと駈入るお染、「逢ひたかつた」と久松に、縋りつけば、「アヽコレ聲が高うござります。思ひがけない此所へはどうして、譯を聞かして〳〵」と、問はれて漸〳〵顏を上げ、「譯はそつちに覺えがあらう。私が事は思ひきり、山家屋へ嫁入せいと、殘しておきやつたコレ此文、そなたは思ひ切る氣でも、私や何ほでも得切らぬ、餘り逢ひたさ懷かしさ、勿體ない事ながら、觀音樣をかこつけて、逢ひにきたやら南やら、知らぬ在所も厭ひはせぬ、二人一所に添はうなら、飯も炊かうし織り紡ぎ、どんな貧しい暮しでも、わしや嬉しいと思ふもの。女の道を背けとは、聞えぬわいの、胴欲」と、恨のたけをいう禪の、振の袂に北時雨、晴間は更になかりけり。曇りがちなる久松も、背撫でさすり聲密め、「其お恨は聞えてあれど、十の年から今日が日まで、船車にも積まれぬ御恩、仇で返す身のいたづら、冥加の程も恐ろしければ、委細は文に殘した通り、山家屋へござ

るのが、母御へ孝行家の爲、よう得心をなされや」と、いへど答もなみだ聲、「否ぢや〳〵私や否ぢや。今となつてさう言やるは、是までわしに隱しやつた、許嫁の娘御と、女夫になりたい心ぢやの。是非山家屋へ行けならば、覺悟は疾うから極めて居る」と、用意の剃刀取直せば、夫は短氣と久松が、止めてもとまらず、「イヤ〳〵〳〵、そなたに別れ片時も、何樂しみに生きて居よう、止めずと殺して〳〵」と、思ひ詰めたる其風情。「そんなら是程申しても、御聞分はござりませぬか」「添はれぬ時は死ぬるといふ、誓紙に嘘がつかれうかいなう」「ハア達て申せば主殺し、命にかへてそれ程までに」「思ふが無理か、女房ぢやもの」「叶はぬ時は私も一所に、お染樣」「久松」と、互に手に手取りかはす、惡緣深き契かや。始終後に立聞く親、「其思案惡からう」と、言はれてはつと久松お染、騷ぐを押へて、「ア、大事ない〳〵、マア〳〵下に居や。因緣とは言ひながら、和泉の國石津の御家中、相良丈太夫樣といふれこさの息子殿、聊の事で家が潰れてから、わがみの乳母はおれが妹、其緣で十の年まで育て上げた此久作は後の親。草深い在所に置こより、知慧付けの爲汕屋へ丁稚奉公、夫程までに成人して、商の道讀書まで、人竝になつたは、コリヤ親方の大恩。其恩も義理も辨へぬは、是見や、先に買うたお夏淸十郎の道行本、嫁入の極つてある主の娘をそゝなかすとは、道知らずめ、人で無しめ、

サこりや清十郎が咄ぢやわいの。疾うから異見も仕たかつたけれど、ちやうど今の樣な事があらうかと、夫が悲しさ、一日延び二日延ばしする間、降つて沸いた銀のもめ事。是言立てに隙を貰ひ、分けて置くのが上分別と思ふから、引負の銀の工面、どの樣に氣ばつても、高の知れた水呑百姓、僅の田地著類著そげ、おみつめが櫛笄まで賣代なし、漸〳〵拵へたさつきの銀。なさぬ中でも親子といふ名があるからは、肉心分けた子も同然、可愛うなうて何とせう。コレお染樣、ではない、此本のお夏とやら、清十郎を可愛がつて下さるは、嬉しい樣で恨めしいわいの。聞いての通りおみつめと、女夫にするを樂みに、病苦をこたへて居るアノ婆樣に、今の樣な事聞かしたら、何と命がござりませうぞいの。若い水の出端には、そこらの義理も絲瓢の皮と投げやつて、こな樣といつまでも、添遂げられるにしてからが、戸は立てられぬ世上の口ぢやはい。エ、アノ久松めは、辛抱した女房嫌うて、身上の能い油屋の聟になつたは、コレ榮耀がしたさぢや皆欲ぢや、人の皮著た畜生めと、在所は勿論、大阪中に指さゝれ、人交はりがなりませうかいの。コレ〳〵〳〵、爰の道理を聞分けて、思ひ切つて下され。申し、コレ拜みますはいの、拜みますはいの。是程いうても聞入れず、親御達が滿足に產付けて置かしやつた其體を切りさいてあさましう死ぬるのが、女の道か心中か。サ久松も其通り、不義密夫の惡名受け、

實親の名を汚すばかりか、世間の義理も主の恩も、むちやくちやにして仕舞ふのが、侍の子か人間か。返事次第で思案がある」と、眞實眞身の剛異見、骨身にこたへて久松お染、何と返事もないじやくり。「是程いうても返答のないは、コリヤ二人ながら不得心ぢやの」「ア、勿體ない、實の親にも勝つた御恩、送らぬのみか苦を懸けるも、私が不所存から」「イヤ〳〵そなたの科ではない、皆此身の徒から、親にも身にもかへまいと、思ひ詰めても世の中の、義理にはどうもかへられぬ。成程思ひ切りませう」「ヲヽよう御合點なされました、私もふつゝり思ひ切り、おみつと祝言致しまする」「そんならそなたも」「おまへも」と、互に目と目にらせ合ふ、心の覺悟はしらがの親仁、「アノさつぱりと思ひ切つて、祝言をしてたもるか」「何の嘘を申しませう」「娘御も今の詞に、微塵も違はござりませぬか」「久松の事は是限、私や嫁入をするはいの」「ヲヽ出來た〳〵。むくつけな親仁めと、腹も立てずよう聞入れてくださりました。晩の間の知れぬ婆が命、息のある中祝言が濟んだと、聞かして下さるが、大きな善根。善は急げぢや、今こゝで盃さそ。おみつ、おみつ〳〵」と呼立つる、聲聞えてや病架より、母は漸〳〵探り出で、「親仁殿、久松もそこにか。待ちに待つた娘の祝言、嬉しうて嬉しうて、此間にない氣色のよさ。大煩の上目まで潰れた因果人、佛樣のお迎を待兼ねたに、難面

い命があつたりやこそ悦ぶ聲を聞くといふも、孝行な久松が蔭、ふつゝかな在所生、心には入るまいけれど、末の面倒見てくだされ、頼みまする」といふ中も、痰火は胸にせき上せば、「エヽ此寒いのに寢所に、やつぱり居たがよござります、冷れば惡い」と蒲團の上、抱きかゝへて久松が、介抱如才納戸より、親子の中も丸盆に、乘せた盃銚子鍋、運ぶ久作、「コレお婆、やつぱり寢ては居やらいで。したが島臺のない代、世話事の尉と姥も新しい。目の見えぬは目出度い秀句ぢや、ハヽヽヽヽ。エヽ目出たい次手に此嫁は何所に居るぞい。おみつ〳〵」と尻輕に、立つて一間を差覗き、「ハテ出ぐすみをして居るは。夫では果てぬ」と手を取つて、「サア〳〵、マアマア嫁の座へ直つたり〳〵。エヽトキニ一家一門著の儘の祝言に、改まつた綿帽子、うつとしからう、取つて遣ろ」と、脫がすはずみに笄も、ぬけて惜しげもなげ島田、根よりふつつと切髪を、見るに驚く久松お染、久作呆れて「こりやどうぢや」と、いふ口おさへて、「コレ申しとゝ樣もおふたり樣も、何にもいうて下さんすな。最前から何事も、殘らず聞いてをりました。思ひ切つたといはしやんすは、義理にせまつた表向、底の心はお二人ながら、死ぬる覺悟でござんしよがな。サ、死ぬる覺悟で居やしやんす母樣の大病、どうぞ命が取りとめたさ、私やもう頓と思ひ切つた。ナ、切つて祝うた髪かたち、見て下さんせ」と兩肌を、脫いだ下著は白無垢の、

首にかけたる五條袈裟、思ひ切つたる目の中に、浮む涙は水晶の、玉より清き貞心に、今更何と詞さへ、涙呑込み呑込んで、こたゆるつらさ久松お染、久作も手を合せ、「何にも言はぬ、此通りぢや〳〵〳〵。エヽ女夫にしたいばつかりに、そこら邊に心もつかず、莟の花を散らして退けたは、皆おれが鈍なから、赦してくれ」も口の内、聞え憚る忍び泣。「アヽ冥加ない事おつしやります、所詮望は叶ふまいと、思ひの外祝言の、盃する樣になつて、嬉しかつたはたつた半時、無理にわたしが添はうとすれば、死なしやんすを知りながら、どう盃がなりませうぞいな」「おみつの何をいやるやら、女夫になりやるを此母も、悦びこそすれ何の死の。ナウ親仁殿」「ソヂヤワイノ、とても此世はない縁でも、せめて未來は、アヽイヤ、未來までも變らぬといふ、盃さそ」と立上り、口に唱名ぶつ〳〵と、佛壇開けて取出す、花瓶の松に鶴龜も、あの世を契る心の島臺。「サア〳〵斯うしてなりと盃さすのがせめてもの心ゆかし。エヽ言ひたい事だらけぢやけれど、此やうな座敷には、たべ付けぬ此仁、三々くどうは言はぬが花嫁、一つ飲んで久松へ。アヽ目出たい〳〵、婆も嘸かし嬉しかろ」「ヲヽ嬉しい段かいの、一世一度の娘の曉、定めて髪も美しう出來たであろ。さき笄に結やつたか」「イエ」「そんなら兩輪か」「ヲヽ兩輪とも〳〵、思ひがけなうすつぱりと、アヽいやさつぱりと能う出來たはいの」「ヲヽ、親父

殿の言はしやる通り、自慢ぢやないが、髪は大てい上手ぢやござらぬ。ホンニ前方大阪行の土産に貰やつた薄の簪、けふの贋に差しやつたかや。著物は取つて置の花色、加賀の裾模様それか」「アイ」「それ著て居やるか」「アイナ」「ヲ、わがみにはよう似合ふぞいの。ならう事なら鐵漿付けて、顔直しやつたおとなしさを、たつた一目見て死んだら、善光寺様の、御印文にも勝つて、未來は極樂往生。ホ、、、、わしとした事が、目出度い中で忌まはしいと、久松必ず氣にかけて、たもんなやいの」と、子に迷ふ、暗き盲目に夫ぞとも、知らず悦ぶ母親の、心を察し誰々も、泣聲せじとくひしばる、四人の涙、八つの袖、榎竝八ケの落し水、膝の堤や越えぬらん。見聞くつらさに忍びかね、お染は覺悟の以前の剃刀、なむあみだ佛と自害の體、久作あわて押しとどめ、「コレ娘御、何が不足で死ぬるのぢや」と、聞き間違うて娘ぞと、母は驚き、「コレおみつ、待つて〳〵」と這寄つて、探る手先に五條袈裟、「ヤア此袈裟といひ此つむり、どうして髪を切つたのぢや、譯を聞かして〳〵」と、急けばせく程せきのぼし、病苦に惱む母親を、見るに娘は猶悲しく、「コレ母様、こらへて下さんせ、添ふに添はれぬ品になり、私や尼になつたはいな」「ヤア〳〵〳〵、そんならさつきにから、母が氣を休めう爲」「ヲイノ、來世の緣を結ぶ盃、此世の緣は切れてあるはいの」「ハア」「ヲ、尤ぢや〳〵。そなたは見えぬがい

つそまし、傍でまじ〳〵見て居る心、推量してたもいの」と、いふ聲咽に詰らせば、「サア〳〵サア、其悲しみをかけるのも、此お染から起つた事、死ぬるがせめて身の言譯」「イエ〳〵、死なねばならぬ此久松、わしから先へ」と駈寄るを、久作剃刀引つたくり、「是程いうても聞入れず、是非死にたくばおれから先へ、物の見事に死んで見せうか」「爺樣が死なしやんすりや、私も生きては居ませぬぞえ」「ヲ、娘出かしやつた。むさい在所に育つても、貞女の道を辨へて、よう尼になりやつたなう。そこにござるが噂に聞いたお染樣か、お前樣や久松を殺しとむないばつかりに、蝶よ花よと樂んだ、一人娘を尼にして、出かしたといふ心の中、思ひやりがあるならば、なぜ存らへては下されぬ。折角娘が、志、無足にするとは胴欲」と、堪へし涙一時に、わつとばかりに取亂せば、「ヲ、道理ぢや〳〵、サア〳〵、どうあつても死にたくば、婆も娘もおれも死ぬる、三人ながら見殺す氣か」「サア夫は」「思ひとまつて下さるか、但し死なうか」「サア〳〵〳〵」と三方が、義理と情と恩愛の、しめ木にかゝる久松お染、死ぬる事さへ叶はぬは、いかなる過去の報ぞと、前後正體泣倒れ、咽返るこそ道理なれ。久作涙押拭ひ、「どうやらかうやら合點が行たさうな。嘸ぞ母御樣が案じてござらう。大事の娘御慥な者に」「イヤそれには及びませぬ、母が慥に請取りました」と、言ひつゝ這入れば、「ヤア母樣」ハアはつとば

かりに詞なく差俯けば、「コレ〳〵お染、野崎參しやつたと、聞いて餘り氣遣さ、ア、イヤ、氣慰によからうと、跡追うて來て何事も殘らず聞いた。夫婦の衆の深切、おみつ女郎の志、最前からあの表で、私や拜んでばかり居ましたわいなう。サア觀音樣の御利生で、怪我過のなかつた嬉しさ、是から直に御禮參。ホンニ是はさもしい物なれど、御病人への見舞の印、麁末ながら」と詞數、言はず出過ぎぬ杉折を、供の男が差置けば、「マア〳〵冥加もない御見舞、戴きまする」と取上ぐる、手元はづれて取落せば、中よりくわらりと以前の銀。「ヤアさつきに渡した此銀を」「ヲ、表向で請取つたりや事は濟む、改めて尼御へ布施、せめて娘が冥加ぢやはいなう。言譯が立つからは久松も元の通り、戻つて目出たう正月しや。取込の中長居も不遠慮、娘もおぢや」と手を引いて、表へ出づれば久作も、門送して、「是はマア〳〵何とお禮を申しませう。お辭宜致すも却て無躾、せめてものお土產に、折つて置いた此早咲、めでたい春を待つ竹梅と、お家も榮え蓬萊の餞物、幾久松が御奉公、大事に勤めて此御恩、忘れぬ證」と差出せば、「ヲ、心ありげな此早咲、譬へていへば雨露の、惠を請けぬ室咲は、萎むも早し香も薄い、盛の春を待てといふ、二人への良い教訓。殊更内に口さがない者もあれば、何角に遠慮せねばならぬ。幸ひわしが乘つて來たあの竹輿で、コレ久松、そなたは堤、お染は船、別れ〳〵に

往ぬるのが、世上の補ひ心の遠慮」「左様でござりまするとも、お志ぢや、乘つて往にや」「娘は船へ」と親々の、詞に否も言兼ぬる、鴛鴦の片羽の片々に、別れて二人は乘移れば、「そんなら久松もう行きやるか。來る正月の藪入を、母も必ず待つて居る」「兄様お健で、お染様、もうおさらば」と、詞まで早改まるおみつ尼、哀を餘所にみなれ棹、「船にも積まれぬお主の御恩、親の恵の冥加ない。取わけておみつ殿、斯うなりくだるも前の世の、定り事と諦めて、お年寄れた親達らの、介抱頼む」と言ひさして、泣音伏籠の面ぶせ。船の中にも聲上げて、「よしないわし故おみつ様の、縁を切らしたお憎しみ、堪忍して下さんせ」「ア、わつけもないお染様、浮世離れた尼ぢやもの、そんな心を勿體ない、短氣起して下さんすな」盲母「ヲ、〳〵娘が言ふ通、死んで花實は咲かぬ梅、一本花にならぬ様に、目出たい盛を見せてくれ」久作「隨分達者で」久松「ハイ〳〵、お前も御無事で」久作「お袋様もお娘御も、おさらば」母「さらば」「さらば〳〵も遠ざかる、船と堤は隔れど、縁を引綱一筋に、思ひあふたる戀中も、義理の柵情のかせ杭、竹輿に比翼を引きわくる、心々ぞ　三重　世なりけり。

長町の段

鬼は外福は内、打納めたる日暮から、晝を欺く長町の、夜店賣物家々の、春を請取る賃づき屋、賑ふ臼取杵の音、とん〳〵疾うからせつきにくる、下女が丸顔とり粉ぬる、鏡の大小子持嗅、分相應の年始め、實に神國のしるしなり。忙しい中で油屋の、小助は肩に風呂敷包、ぶら〳〵來る餅屋の門、「ヤア勘六此所にか。今日は年越だ、一日の休み所を透かさず、賃搗にまで雇はれるとは、きつい精の出し樣ぢやな」「イヤモ是もせう事なしぢやはいの、何が寡なり宿はなし、年中の飯米は餓飩か餅か、五文取の代五六百、此雇賃で帳消さすのぢやが、貴樣の世話でそちの内へ、絞に雇はれて行くにつけ、いつぞやの座摩での仕事、久松めがじろ〳〵と、おれの顔を眺めをると、どうやら氣味が惡いわい」「ハテさて日頃に似合はぬ正直な事いふわい。貴樣を絞に入れて置くのも、久松を目論にかけてほい出す仕事の種油。あすは大晦日、仕舞仕事ぢや、朝から來てたも。今夜は槌の子でも抱いて寢る晩、そこで我等も隙貰うて、是から色の所へ行くぢや」「ア、さうかして月代もすつぱり」「ア、こりや障つてくれな、たつた今床で結立ぢや」「ム、それに又其風呂敷は何ぢやぞい」「是か、こりや立てに行く大盡衣裳ぢや。内からは著て出られぬ故こゝまで小出し、羽織は卽此隣の古手屋に誂へて置いた。ヤコレ、此間の茶縮緬仕立ててあるかな。ヤ何ぢや、もう追付出來ます、エ、遲い〳〵。今夜色に見せに行く

のぢや。こゝからすぐに著かへて行き、何でも今夜はゑら立てぢや。閑六、貴様も辨慶に連れて行く、其代おれを旦那あしらひにしてたも。コレ必ず久三といふまいぞ」と、太平樂の下稽古、隣へ入れば立替る、季もあら玉や往來の、足も春めく祇園道、主持つ身には年德の、恵方參もそこ〳〵に、せはしう戻る久松が、摺違うたる挑燈の、印に目早く見返る女、「申し〳〵お若いの」「ハイどなたでござります」「イヤ率爾な事ぢやが若しお前は」と、言ひつゝ燈に顔見合せ」「久松樣か」「ヤア乳母のお庄。是は」とばつたり小挑燈。「オ、危い、灯を消さずと、とつくりと久し振の顔見ませう、半元服さしやつてから、お果てなされた丈太夫樣にとんと其儘、オ、きつとした好い殿ぶりやの。此間の文定めて見やしやんしたであろ、乳母が日頃の念願叶ひ、今度殿樣におめでたで、多くの科人も御赦免なさるゝ折柄、一つの功さへあるならば、太丈夫が悴久松、和泉の本國へ歸參さするは此時、其功の立て樣は、先達て紛失の吉光の守刀、即ち此度のお目出度に、正月三日鎧開にお飾りなさるゝ、それまでに其刀を詮議して差上げなば、跡目相續相違あらじと、御家老中の仰渡され、まだ年もあるけれど、親方樣へ暇の願、聞屆があつたかまだか。マア年越に健な顔見て、嬉しうござる」と餘念なき、眞身の詞に久松は、今更國へ往なれぬ譯明けていはれず、「夫はマア嬉しいが、師走の内も今日あすになつて、

餘りせはしい急な出世。さうして其吉光の刀は手に入つたかや」「さればいな、大阪谷町の質屋にあると聞いた故、尋ねに往たれば、其質は半年前に流したといふ。彼の刀の失せた折からお國を出奔した鈴木彌忠太、こいつが盗んで立退いたは知れてある、其質の置主の名を尋ねても言はぬからは、此質屋も相對と思はるゝ」「フウ何といやる、谷町の質屋とは、若し山家屋とは言はぬか」「ヲ、それ〳〵、其山家屋佐四郎、彌忠太は此長町に居るげな。慥な手懸あるからは、必ず氣遣さしやんすな。まちつとの所ぢや、煩ふまいぞ、コレ和子。オヽマア私とした事が、やつぱりぼん樣の樣に、追付け千五百石の若旦那、立派な馬に乘せまして、はいしいどう勢お國入、お日出たうござります」「何から何まで乳母の深切、孤子になる久松、けふまで命恙いも、そなたの兄久作殿のお情、其刀の質請にも、定めて金が入らうがの。是はたしにもなるまいけれど、重々世話の恩返」萬分の一歩七つ八つ、守袋を開けて出す、はずみに落ちるお染が起請、隱すを押へて、「コレ申し久松樣、奉公人に似合はぬ黄金、誰に借らしやつたぞ、合點が行かぬ」「アヽイヤ〳〵氣遣な事ぢやない、此壹歩は小遣にせいと御寮人樣が下さつた。其書いた物は大事の守、こつちへたもいの」「イヤ待たしやんせ。ハテ情深い御寮人樣ぢやな。シタガ餘り親方の情過ぎるも善し惡しの、なには兎もあれ、しほらしいお前の志の金、

預つて置きませう。此書いた物は熊野の牛王か、定めて大切な守であらう。神様の名を書いた物、そよこしうしては今の様に、つい溝へでも取落せば、守が却つて其身に祟る、こりやわしが預ります」と、ちらりと見付けて懷へ、くろめる乳母は守神、胸に納めて、「久松様、明日は私もお家へ參り、倶々に暇の願ひ。親方持ぢや、マア早う往なしやんせ、諸事は翌日」と言殘し、立別れては立止り、「コレ申し、必ず國へ行くのぢやぞえ。アヽどうやら濟まぬ顏付ぢや。ほんに又油斷のならぬ、いつまでもほん様ぢやと思うて居る内、つい坊の親にならんすなえ。コレ怪我さんすな和子」いとしや仕馴れぬ奉公をと、昔思へばひと雫、涙催す師走空、見返り〳〵三重別れ行く。往來人絶え長町の、夜店の賣聲、小唄物眞似、「なまいたんやほ、厄拂ひましよ、落しましよ。ヤアラ目出たいな、何ほう目出たいな。こなたの御壽命申さうなら、鶴は千年」『龜ぢやないか』「三か」「六か」と一所へ、咳きよるの小働き、「ナントよい仕事したか」「サア、ひがだいの幻妻、侍に逢て物いふ間に、ちぼ引いた」『ヤア結構な守ぢやな』『中には壹歩、書いた物も入れてある』『日本橋でてうふせう」「アレ〳〵又幻妻が此方へうせる。かはせ〳〵」とばらばらに、散る三人を見付けた勘六、跡を慕うて飛んで行く。非道の刀さすが世を、忍び頭巾の浪人に、小腰屈めて付添ふお庄、「うさんな者と思し召し、お名をお包みなさるゝは尤。一昔過

ぎた事なれば、御見忘れなさる筈なれど、此方にはよう覺えてをります。石津の御浪人鈴木彌忠太樣、其時の同家中相良丈太夫の家來、三平が女房のお庄でござりますはいな」「ハテナ、成程さういやれば見請けた樣な。シテ此彌忠太には何の用」「ハイお願がござります、あなた樣が國元を、お立退なさるゝ折節、紛失致した吉光の刀、其誤で主人丈太夫家退轉。此刀が今でも出れば、主人の跡目相續致す。承れば當所の質屋、山家屋に質物になり、限月は切れたれど、其置主さへ知れたれば、質札を買取り、此方へ請戻したさ、色々と心を碎いて金子十五兩、才覺致して參りました。どうぞ其金で質札を、私へお賣下されうなら」「ヤ、コレ〳〵何と言ひめす、スリヤ其質の置主を、此彌忠太ぢやと聞召さつたか」「イヤ左樣でもござりませねど」「夫に又麁相千萬、其置主は卽ち盜賊、さしつけて身共ぢやといやれば、此彌忠太を盜賊といふも同じ事、女と思ひ聞流せば慮外至極」とかさ押にきめ付くる。「イヤ全く左樣ではなけれども、若しあなたが此置主を御存じならば、お知らせなされて下さりませい」を打消して、「ア、師走の果に左樣の事、相人になる馬鹿があらうか、とはいふものの、侍は相互尋ねてやるまいものでもないが、其詞偽なくば、十五兩の金子、そこに持つて居召されうの」「イヤ旅宿に預けて置きました」「ム、手前も只今急用で他所へ參る、明日參つて篤と談ぜう。お手前の旅宿は何所

だ」「ハイ、こんな事もあらうかと、則旅宿の所書、認めて置きました」と何心なう懐へ、ふつと氣の付く守袋、捜せど見えずはつと惚り。「イヤ、コレ〳〵、身も只今は心ぜき、重ねて緩りと。早參る」と、袂ふり切り急ぎ行く。「ア、是申し今暫く。エ、折もをり今の守、若し人に拾はれては、久松樣の身の大事。其も氣遣ひ、今來た道へ。イヤ〳〵、刀の詮議は延されぬ」と、我身は一つ二筋道、忠義一途に追うて行く。勘六に締上げられ、手をすりごうの痛い顔、「ア、申し、出します〳〵」「出しあがれ」「今働いたは此守、一歩が八切、其儘でございます」「まだ是計ぢやない、何も彼も吐出しをろ」と、せごす後に立聞く彌忠太、「ヤアわりや勘六ぢやないか」「ヲ、彌忠太樣か」「彌忠太かとは横道者、汝よう身共をやつたな」「サ、、、何にも言はしやますな。コレ此紙入はお前のであらうがな」「ヤ何が」「ハテサお前のぢや〳〵、中にはしつかり、是が日外の入れかへ、ナえいかえ」「ム、〳〵いかにも身共が紙入、よく盗んだな」「まだ〳〵、コレ此印籠」「ヲ、それも身共がのぢや」「イエ〳〵其二色はお前樣のぢやござりませぬ」と、いふを言はせず、「どうずりめ」と、二人が寄つて踏んづ蹴つ、いがみの物取る大盗人に、命からゞ〳〵逃げて行く。二人は跡を見廻して、「彌忠太樣、先度の壹貫五百目は、丁半でころりと仕舞うて、ちぎ文もおはしまさぬ、夫で算用ずつてにさんせ」「エ、ふといや

つ。さうして此紙入には何程ある。ヤアこりやはした錢ぢや ぞよ」「うまい人ぢや、銀なら何のこなんにやらう。マア〳〵腹立てさんすな。此守袋には、お性根が入つてあつたれど、そりやおれが飲んで仕舞うて、跡に書いた物がある、慥に證文と思はるゝ。おりや讀めぬによつて、こな樣に進上する」と、渡せば取つて夜店の燈。「ヤア、、こりや是、お染と久松が起請、よい物が手に入つた。油屋へ仕懸けてぐずりの種」「コレ〳〵そんなら二つ山ぢやぞや」と、何でも取りつく餅屋の隣、「待つた暫く。此小助も其仲間へ入れて貰を」と、ぬつと出でたる男ぶり、久三のどんざ引きかへて、壹丁目脇指やつ仕立、當世風の旦那衆天窓、「彌忠太樣何とえらいか。よい事聞いた、祝ひに今夜は我等立てぢや〳〵」「そりや過分なが、未一口儲の手筋、片付けて跡から參らう」「チ、此勘六も今一臼取つてから、貴樣の餅搗祝ひに行かう」「そんなら勝曼で待つて居る。打つてくれ」シャン〳〵、「も一つせい」しやん〳〵、「祝うて三度」おしやしやんのしやん、しやん〳〵しやんと引別れ、葭簀も折からよい時分、行かんとせしが立どまり、「ハア併しと、久しう行かぬ馬場前の、田中屋へ行かうか、アいや〳〵きやつが所はぶさ打つてある。それよ、勝曼の色めが醴に、生姜入れて待つて居る筈。先此方へ」と行きては戻り、ア、可愛や髭剃のおふさが借錢の咄、正月屋のぜんざいを、お前と氣入らずに喰

ひたいというたが、是も行きたし、醴も飲みたし、どうせうか、かうしようまん六道の、辻に待つたる以前の丐共、「こちらが仕事の邪魔しをつた侍めはソレそいつぢや。たよめ〳〵」と三人が、有無を言はさず引立つる、夢見た樣な小助が難儀、恟り駈出す勘六を、そいつもぐるぢやと摑み付く。心得たて臼とりぐの、餅に片足踏んごんで、べつたり尻餅あも重ね、運のつき臼摑み付く、眞額げんのみ五文取、起上つては又ころ〳〵、取粉にまぶれて頰眞白、どれがどれやら味方同士、ぶつやら踏むやら暗紛れ、跡をも見ずして　三重走り行く。

油屋の段

難波詠の其中に、名におほさかの鬼門角、油のしめ木引きしめて、異見の種も後家育、山家屋へ嫁入の、日數迫りし大年の、拂は宵に片付けて、春を壽く注連飾、松の盛砂高盛の、飯椀づらりと仕事仕の、夕飯時は賑はしょ。「ア、おさつ殿遣立てました。今日は大晦日、一年中の仕事納め、早う仕舞うて知行米は、マア腹へ取込んだ。此勘六めはどつちへうせた、めんようろ」「イヤ〳〵酒喰ひの筈ぢや、あいつは薦かぶりから成上つた奴ぢやげな」と、傍に居ぬ者譏

り合ふ、口の悪いは缺徳利、提げて外から、「ヤィ〳〵、勘六が事譏りあがつたは長八めぢやな」「イヤおれぢやない久兵衛ぢや」「イヤおれぢやないぞ〳〵」「エ、喧ましい、どいつこいつの用捨はない、皆覺悟してけつかれ。人の錢借つては飲むまいし、おれが酒飲んだら、汝等が足でもひよろ付くか」「何のいの、ちつと傍あたりが熟柿臭いばつかり」「吐しをんな、惣體油絞といふ者は、襠袢一つで働く商賣、取分けておれは寒の師走も日の六月も、年中裸で暮す故、だはの勘六と異名付いた男、此仕事せいでもえい錢を儲けるけれど、打入れ打上げる、けがな身に付けた例がない。汝らは錢が無いから得喰はぬのぢや。おれが此嗅をかどしてこまるを有難いと思ひけつかれ。一盃入れて跡で飯を喰ふのぢや。此盛つてあるおれが飯に、どいつでもほでさいたら、腹袋引裂くぞ」と、何でもふしづく鬼の面、ほつた腕は惡鬼の看板、障らぬ神に祟なし。「仕事の賃さへ貰うたら、往んで早う年取らう」「ヲ、どうなと勝手に仕をれ。おりや往なうても盆はなし、此酒の勢にぐつたりと、いつそ來年迄一寢入してこまそ」と、裏へ轉込む拗强者に、構はぬ手間取、「お家樣へよいやうに。ホンに此久三の小助は、今朝からとんと顔見ぬなう」「サァ昨夜の年越からまだ戻らんせぬ」「ムゝ年越からとあれば、何所の豆を喰ひに往かれた、大かた納屋の下の影裏豆、こちもいんでかゝの煎豆、お福は内に待つて居

よ」と、住家々々へ立歸る。木綿でもなく絹でもなく、せう事なしの山蠶紬、久三小助が里通、勝曼の茶屋で昨夜から、しゆつぽく酒の二日醉、こそのお山に送られて、瓦屋橋にふつと氣が付き、「ヤアこりやうか〳〵來て早こちの内ぢや。もう往んでくれ〳〵」「サア最前からいねいねいひぢやけれど、内方が見たさについて來た」「ア、コリヤ覗くな、手代衆が見やしやる。イヤサ手代共は大事ないけれど、女共が見たら悋氣する。ちやつといね〳〵」「そんなら旦那樣、かた三日違へなえ」と、ぴんしやん歸るを待兼ねて、番部屋の物蔭で、著かへる衣裳繻子の帶、上著くる〳〵すつぽりと、元の久三の尻からげ、急がし顔で竹箒、昨夜ののらの掃溜を、跡から拭ふふき掃除、手桶の切水ぱつ〳〵と、浮名は餘所に立つぞとも、知らぬ久松小隱に、悋氣口舌も聲高に、いはれぬが苦の世界なり。「お染樣、そりや何おつしやる。許嫁のおみつさへ、お前には見替へぬ私、それに何の浮氣らしい、外の色事所かいな」「イヤ〳〵何ほさういやつても合點が行かぬ。是見や久樣と書いたお山の文が再々來るは、どうでも茶屋狂しやるに極つた」「コレは又疑深い、何所の奴がそんな狀。誓文私が茶屋へ行たら、西から日が出る」東堀、いづこ川筋師走の懸取、「田中屋でござります、中拂の殘り拾貫五百文、御算用賴みます」「ム、田中屋といふは覺えぬが、こな樣何賣つたのぢや」「イエ私は馬場前の

茶屋でござります、久様にお目に懸れば御合點、女郎衆の取かへが六貫三百、殘は御酒取肴」「ア、是滅相な、此久松馬場前とやらついに往た事もない。覺えない〳〵」「ハテこな樣の知つた事ぢやない。久樣に逢はして貰を」「サア久松は私ぢやはいの」「イヤ久松ぢやない、久といふは此内の旦那殿、旦那に逢へば分るこつちや」「イヤ〳〵そんな名は爰にはない」「ハテ扨、コレ旦那の口から直に聞いた、おれが名は油屋の久三郎とおつしやつた、久はひさといふ字、そこでこつちの島では久樣といふはいの」「エ、そんな事こちや知らぬ」「知らぬぢや濟まぬ」と聲高に、見ぬ顏しても居られぬ小助、門から手招き、「コレ〳〵〳〵爰ぢや〳〵、久三郎是にをる」「イヤアお前は久樣、旦那樣か」と、悔りあたふた門口へ、「エ、不粹なやつではある、内へ這入るといふ事があるものかい」「デモお目に懸らにや濟まぬ出入。ぢやがお前はテモ薄いお姿で、そして御自身に門掃くとは、こりやどうでござります」「サイヤイ、大勢の人を使ふ者は、旦那から斯うして見せねば、廻るものぢやないわいやい」「ハア聞えました時に聞えませぬは日外から、お風が替つて勝曼へお出なさるゝげな。そして是程の御身上に、私が僅の懸を」「サア〳〵やるはいやい。ソレマア三歩取つて置け、跡は後にこつちから、男共に持たしてやる。それも面倒い、おれが直に持つて行く」「そりや有難い、そんなら必」「違やせぬ

はい。是迄算用せずに置いたは、お山めがいき方が悪さに、肝癪で態と引ずつたのぢや」「イヤそりや旦那お道理なれど、お山の肝癪で呼屋を踏むとは大きなつぼ、ソレ重井筒にもござりまず、踏むな呼屋に科もない、火燵にたんと火をいけて、待つて居ます、くわつとお立て」と、こそ屋はいき〳〵、生玉さして立歸る。「コレ小助殿、此聞がしい大晦日に、何所へ往て居やしやつた」「へゝ前髪がなまちよこざい置いてくれ。久三と手代二人前の此小助、請拂は昨日しまふ、年越に隙貰うて、戻ると直にはき掃除、此働きが目に見えぬか」「イヤ〳〵さう計ぢやない、明日の節日の椀家具、藏へ行て出してこいと、かゝ様の言ひつけ」「イエ〳〵藏の出し入れは、久三の役ぢやござりませぬ。お氣にいりの久松、御寮人様と連立つて行きや」「それでは詞に角があつて氣の毒、今のはわしが言損ひ、サアいつしよに」と傍輩の、機嫌取る手をひつしよなく、「ハテ行けなら行くが、邪魔になろがな。あすは元日、大かた姫始の取越、お染様の藏の鍵、あけまして お目出たうござります。エゝ同じ傍輩で、門口から御禮申す事さへならぬ、此久三には何がなる」と、けたい悪口傍輩悩氣、ぶつくさつぶやき立つて行く、年一日も暮れかかる、四十の浪も世話に寄る、乳母のお庄は久松に、尋ねおほさか油屋の、中戸に音なひ、「頼みませう」「どなた」と内より出合頭、「久松様か」久「ヲ、乳母か、よう來てたもつた。マアア〳〵此

所へ」と深切は、替らぬ中の行燈の蔭。男が先へ箱挑燈、點し立てたる禮衣裝、上下ため付け山家屋佐四郎、「歳暮のお禮」とつゝと入る。佐コリヤ喜八よ、今夜は是で夜が更る、夜半前に迎ひにこい。お勝殿は奥にござるか」久「ハイ、さやうに申しませう、暫くお待ち」とつい立つて、行くも見送る主思ひの、乳母が氣の付く煙草盆。「ほんに幸ひよい折から、今日もあなたへ參つて、お尋申さにやならぬ譯、彼吉光の守刀」佐「ア、これ、一昨日も申す通り、其刀は手前質に取つたれども、もう疾うに流れました」乳「サア其儀は承りましたが、其置主は若し鈴木彌忠太とは申しませぬか」佐「イヤもういかい事の口數、すゞきやら鰯やら、此方覺えは致さぬ」と、塵灰つかぬ詞の潮。「お茶上げませう」と久松が、差出す茶碗引つたくり、佐「エ、小じたたるい丁稚めぢやな。手入らずの染茶碗、ちよこ〳〵破りさうな頰付、茶碗の代に親方の前で、何もかもけつ破つてこます。けふは後家に逢うてめつきしやつき、嫁入の延びるもほうずがある、結納おこしてから幾月になる、今夜中にお染を渡すか、さうなけりや結納の證の脇差一腰金拾兩、取戻してこちから變改。其代に又借して置いた百二十貫目、毫まで算用して取るのぢや。ア、案内仕をれ丁稚め」と、しやちこばつたる麻裃、疵持つ足の穂に顯れ、問はぬに夫とおちの人、「そんなら和子、二階で待つて居りますぞえ」と、心殘して立つて行く。藏からそつ

と小助が悪智慧、小判の包封押切り、「まづ拾両忝い。此盗人を久松めに、さうぢや〳〵」と一人笑、人に難儀を塗文庫の、中へ目錄蓋ぴつしやり、「しめたぞ〳〵、時に此金、ちつとの間、何所ぞに」おくから、「小助どの〳〵」と呼立て出づる下女のおさつ、「コレ〳〵小助殿、今奥で山家屋の旦那様と、お家様と、結納を戻せと遣つょ返しつ、其中に取交ぜて、結納の金が見えぬというて、大ていの詮議ぢやない。サア〳〵ごんせ」「チ、〳〵そこへ〳〵」エ、どこへ隱して置き所に、事かく折敷飯椀の、高盛へつょ込む小判のごもく飯、上から押付けそしらぬ顔、打連れて行く奥から口、目から鼻へ抜目のない女主、後家に負けぬは銀の利の、かさにかかつて聲山家屋、「お勝様、結納の證潔白に、戻さうと言はしやつたから、今更否はいはれまい。サア〳〵戻して貰ひましよ」「サア今お聞なさる通り、大切にして簞笥に入れ、しつかりと藏に入れて置いた結納の金拾兩、今になつて見えぬといふは」「コレ置かしやれ、言掛りで戻さうとはいふたれど、結納戻せば百二十貫目立てにやならぬ。所で何なと引延す、てれんはたべぬ。人にこそよれ山家屋の佐四郎、一保が講釋三年聞いた男ぢや、そんな計略に乘つてたまるものかいの。ガ又嘘でなくば其結納お出しなされ。サア〳〵何と」とつょかょる。主の當惑取分けて、氣の毒餘る久松、「私が差出がましけれど、大まいの銀さへ立てうとあるお家様、纏拾

兩の金を惜んで、何の間合おつしやらう。油屋商賣は大勢の仕事仕、毎日入込む事なれば、誰が業かは知らねども、失せたには違なし。私共もめい〳〵身晴、共吟味して、今夜中に急度お目にかけませう。お疑ひ晴らされませ」と、挨拶する程むつと顔、何がな小みづをくり出す勘六、おうへにどつさり大あぐら、「コレ丁稚殿、貴樣あぢいな事いふの。此所の内に金が見えにや、仕事仕のおいらが盗んだのか」久「イヤ〳〵さうではないわいの」「イヤさういふのぢや、仕事仕が大勢入込み、うさんなといふからは、絞仲間を盗人といふのぢや。殊におりや今日此頃の新面ぢや、猶以て耳に立つぞ。但し何ぞ證據があるか、ヨ、證據もないに盗人呼はり、けたいが悪いぞ、忌々しいぞ」小「ア、是々聲高にいやんないの」「イヤ〳〵〳〵止めやんな小助、あのせんまめ仕樣がある」小「サ、尤ぢや〳〵、わがみの立たぬ樣にはせぬ、マア〳〵待ちやいの」「イヤ止めやんな〳〵」小「サア〳〵能いわいの、わがみの立たぬ樣にはおれがせぬ、喧しいやんな〳〵。古町ぢやはいの、人が立つはいの。勘六正直者ぢやさかい、えらう腹立て召さる。ハヽハヽヽヽ。イヤコレ久松、ちよとおぢや、サア言うてしやまいの」「言へとは何を」「ハテわがみが金盗んだ事を」「コレ〳〵小助殿、そりや何いふのぢや、覺えもない事を」「ハテ扨もう叶はぬ事を、其眞顔が厭ぢやはいの。證據の出ぬ中、サア綺麗にいうて仕舞うだが能からうぞや。サア

おれに言や〳〵」「エ、知らぬはいの」「ヤ實正覺えないか。エ、氣の毒ながら、證據出さずばなるまい」と、久松が手習ひ文庫引つさけいで、「こりやこれわれが文庫、アノ佐四郎樣から、結納の證について來た目錄、汝部屋の入物の中に、コレ〳〵〳〵入れてあつたが遁れぬ證據、サ天命ぢやの、是でもわがみが盜まぬか」と、差付けられても覺えなき、身の災難に詞なき、久松が胸づくし、取づて引する勘六が、「ィヤばりめ。うぬが盜んだ金を人にぬつて、ようおれに紋付けたな」「コレ〳〵勘六喧しいやんな、金の有所ぬかさねば、どづき居ゐて言はすのぢや。エ、吐しあがれ」と責めせつてう。お勝は聲かけ、「小助待ちや」「エィお家樣、なぜお止めなされます」「ハテ下人というても人の子、疵でもついたら何とする。殊に其金の盜人、急度久松には極らぬ」「アノ、是程知れた證據のあるに」「サレバイやい、其久松が文庫は、開いてあつたか錠がおりてあつたか。金盜む程の者なら、其目錄は破つて捨てる筈の事を、我科の知れる樣に、わざ〳〵我文庫に入れて置いて、しかも蓋開けて置きさうなものか、但し又錠がおりてあつたを、そなたが開けたら、人の箱錠捻切るは盜人の行作、サ夫ならそちにも疑が懸るぞよ」ホ「サそれは」「其樣に手荒うせずと、靜にしても詮議はなる」と、ぎつくり詞の角屋敷、納めた後家にいらつく佐四郎、「ヤアそりやお勝殿、最屓のさばきぢや、現に知れた盜人の久松、

そつちで詮議がならずば、町内へ斷つて、代官所へ引摺つて行く。小助しめ上げて詮議仕やいの」ト「ハイ〳〵合點」と立ちかゝる。「コリヤ主の詞を背くのか」と、主命流石うちつく腕。「小助せくな、此丁稚めは勘六に任せて置け」と、久松が前髪引付け平手でびつしやり、起直つて、久「コレ勘六、こりや何とするのぢや」「大ずりめ、小助は傍輩だけで手ぬるい。其日雇はれの勘六、どなたにも遠慮はない。金はき出さにや、商賣の油の滓喰はすぞ。胴性骨の油糟、絞り出しても言はさにや置かぬ」と、土間へ引立て踏落され、髪もばら〳〵あら涙、こたへ兼ねて駈出る乳母、「マア〳〵〳〵待つて下され、待つていの」と庭に駈けおり、「コレ久松樣、お前の身に憂のない言譯は私がする。ほんに〳〵今でこそ町家の奉公、筋目正しい此和子に、そんなさもしい心があらうか。無念にござんしよ。最前からお前より、わしが口惜うてならぬはいなア」と、背撫でさすれば、「ハ、、、、何ぢや、けたいな婆が出た。ごくにも立たぬ言譯せずと、今爰でだはの勘六が、盜人の政道するをよう見て置け。ぢやが醉醒で俄にぐつとひだるうなつた。飯一ぱい喰うて、腹丈夫にしてから、どうするぞ待つてをれ」と、飯椀引出し箸取りかゝれば、小助はびつくり、「ア、コリヤ滅相な〳〵〳〵、夫はマア何するぞいやい」「ヤ何するとは、おれが飯をおれが喰ふのに、其が何で滅相な」「イヤサ、夫はいかにもわれが飯さうなといふ事」

「サア、おれが飯ぢやによつて」「ア、コリヤ〳〵〳〵、其飯喰ふないやい」「妙な事をいふ人ぢや。ム、ばりめを行ふのに隙が入るといふのか。よい〳〵、そんなら飯喰ひ〳〵やつてこまそ。一責せめたら、白狀さすは膳の上の箸」と飯椀はなさぬ勘六、「ア、是はまた情ない。ア、こりや〳〵〳〵〳〵、マア夫を下に置け、此飯は喰はされぬはやい」「エ、けたいな、そりや又何で」「サイヤイ、金の盗人が知れぬ中は、仕事仕にも皆疑が懸つてある、ヨウ、若し汝が盗んだのなら、盗人に飯喰す法が有るか。身の垢を拔いた上で、跡で喰へといふ事」「ム、こりや理窟ぢや。そんならこいつ、もうしごいて仕舞はにやならぬ」「ア、是々大事のおれが扶持切米、物いひの付いた飯ぢや、やつぱり此所に置いて貰を」「樣々の事で食どめしられる、おれが爲には食敵、汝には是喰はす」と、割木引提げ立ちかゝる。「勘六待ちや、家來の吟味は主がする、雇ひ人のそなたが入らざる差出、扣へて居や」「そんなら小助が」「イヤわがみも賴まぬ」佐「ヲ、すりやこな樣の直の吟味、見物致そ」と、つゝぱる佐四郎、いやといはれぬ此場の表、「賴みませう」「小助表に案内がある、小助々々〳〵」「ハイ〳〵〳〵、ハテどなたぢや」と、出迎ふ門口、兼てや牒しあひけんを、互に見ぬ顏空とぼけ、「拙者浪人者でござる、此度有付いて國方へ參るにつき、路用の拵に手詰り、お家を見かけて御無心、と申して唯は申さぬ。寶は

身の差合せ、賣りに參つた一品、ちよと御覽下され」と、懐より取出す一通、「コレ淨土宗一向宗にはなければならぬ、圓光大師の一枚起請、贋か正筆かは、たつた一目御らうじると、忽知れるお見知の手跡、ナ、何と是計は買はつしやれずはなるまい。天罰起請文の事、此跡を讀まずに直を付けるが商の祕事、娘御に買うて進ぜられたら、一生の災難を遁れる守本尊でござらうぞや。但し御所望にないか。ナニ夫にござるお若い人、其元にも入用の物ぢや、お求めなされい。現當二世の起請文、イヤもう〳〵ありがたい御文章、お望みならば讀んでお聞かせ申さうか」と、意地くね惡う鬼門の肝先、「ドレ拜見致そか」と、立寄る佐四郎は金神の、中からお庄が引取つて、「一枚起請買ひました、わたしに賣つて下さりませ。御不肖ながら」と差出す、金包手に取上げ、「こりや僅金拾五兩、こんな事では」「サア〳〵夫は當座の手附」「ム、手附とあれば請取つた」乳「價は何程致さうと、わたしがアイ買ひまする。今年は夫の十三年、此有難い御文章が、何と人手に渡されう。コレ久松樣、お前の親御丈太夫樣、預りの御重寶失うた科、阿房拂に逢ふのが無念さ、お覺悟の切腹、夫三平介錯の上主人の追腹、お前は漸〳〵六つの年、兄久作の在所へ預け、わしは國にとどまつて、どうぞ今一度相良の跡目相續の願、御家老中へ月々の訴訟、其時失せた殿の重寶、此大阪の質屋にあると、聞いたはお主の出世時と、其

爲に拵へた此金なれど、差當つた地獄の苦患、遁るゝは此一枚起請、其大切な事を何とも思はしやんせぬは、親御の恩を仇に思うて居さしやるから。コレ見やしやんせ、妙慶西岸信士俗名三平、こりや私が夫の戒名、片時も肌身を放した事はない。お前の親御は劍樹院等覺居士、其心では命日も、忘れてがな居さしやらう。コレ、此位牌の夫三平が、忠義の心を少しでも思ふ氣があるなら、未來の約束、忝い御文章を反古にして、國へ歸つて命長う、家相續して父御樣に、草葉の蔭からにつこりと、笑はしまして下され」と、恨みも異見も十分一、明けていはれぬ百千萬、我子の樣に養ひ君、思ひ詰めたる眞實の、母より深い大恩慈悲。久「誤つたく、、もう堪忍して〳〵」と、歎けば涙拭いてやる、あまいは乳母のならひなり。歎を餘所に山家屋が伸欠、侘「ア、こりや盜人の詮議が來年になりさうな。イヤコレ御浪人、見た所があの噂、跡金の才覺心元ない、手附限の事であろ、いつそおれ買ひましよか」乳「イエ〳〵〳〵外へはやらぬ、私が先約。サア跡金は何ほでござんす」浪人「惣高金は五百兩」乳「エ、イ」「安い物ぢや、サア只今請取らう」と、聞いて今更ハツとばかり、當惑顏を見て取るお勝、「イヤ〳〵〳〵、無躾ながらそりや出來まい、五百兩なら私が買ひましよ。今がかりに渡さう程に、さつきの手附はあの人へお返しなされ」浪「成程々々さうなうて叶はぬ處、めくさり金で大事の代物、買取ら

うとはのぶとい女め。手附金ソレ返す」と、投出す包お勝が取上げ、「お侍様、こりや最前の手附とは違ひましたな」「何が違つた」「イヤ違ひました、中は見いでも知れてある、大かた是は戎様の質小判」浪「ヤ、ァ、そりや何か手前存ぜぬ、あの女が」勝「イヤおつしやんな、こりや最前の金ではない、わしがよう見て置いた。あの人が渡した金は、反古に包んでござんした、是は是白紙。包が違うてあるからは、お前が内から拵へてござつたふきかへの質金、正眞の金は懐にあらうがな。日外久松がかたられたもちやうど此傳、是をたぐつて詮議したら、何が出ようも知れまい」と、穴を見付けた發明後家、暗い仕事は油屋の、明にきよろつく化のかは。「イヤ其詮議よりこちらの詮議、ドリア起請の正體を顯はしてお目にかけう」と、立寄る小助を勘六が、取つて突退け起請の一通、寸々に引裂いたり。「コリャやいく、大事の證據なぜ破つた、こつちへおこせ」と言はせも立てず、滕どつさり片手投げ、「コリャ何しをる」と摑みつく、頬を飯椀菩薩の罰、勘「ソレ久松小判が出やうが」久「ホンニちやうど拾兩、そんなら此盗人は」「チ、こいつぢや、もう遁れぬはい。道理で飯喰み仕をると思うた。何でも三つ山の約束に、己一人よい事せうとは、さりとは下心の惡いがき、もう此勘六魂が返つて、是からは久松が味方、何も角もいうて仕舞ふからは、何所へ尻が行かうも知れぬぞ」「エ、もう赦されぬ」と取付

くを、脾腹の當身久三郎、きうともいはず目を白黑、一の裏は勘六が、みたのかはりに山家屋も、傍杖こはがるたんば色。久「サア佐四郎樣、拾兩の金子出しましたぞえ、持つてお歸りなされませ。是でも私が盜みましたか」「何のいの、正直正路な丁稚殿、有所さへ知れたら、持つていぬには及ばぬはいの」勝「ム、さうおつしやれば娘にも、言分はござりませぬか」「何のあろぞいの」勝「そんなら嫁入の日限は」佐「春永に〳〵に。ア長居致した、早ういんでいねつみませう」とそこ〳〵に、底氣味惡う彌忠太も、そろ〳〵〳〵表へ、勘「侍待つた、懷の金置いて行け。但し勘六が引出さうか」勝「イヤ〳〵コレ、あの拾五兩は御文章の代金、深い志の金、お庄殿へはわしが返す。どつこも波風ない樣に、わざと何にもいはぬぞえ」「ヲ、サ、身共も何にも言分ない」と、强い顏でも胴震、肝を菜種に油屋の、辻から横に逃歸る。お庄はいそ〳〵、「結構なお家樣の御了簡で、久松樣の明も忽、打つて替つた勘六殿、急に善過ぎて合點が行かぬ」「コレ氣遣せまい此勘六、久松殿の肩持たねばならぬ譯は、是見て下され、腕に卒都婆の入墨、妙譽西岸信士」庄「ホンニ此位牌の戒名と、合うたは不思議」「母者人健でござつたの。こな樣の子の三之助でごんすはいの」庄「ヤア」勘「別れたは十四の年、見忘れさんしたも尤、斯ういふ髭頰になつたもの。一體が少さい時からいけずであつて、陪臣の悴の分で、歷々の家中の子

供衆に、礫打つたり天窓はつたり、手討にもせにやならぬ處を、親父樣の慈悲の勘當。間も無う死なしやつたと聞いてがつくり。始めてちつと人間の魂が出來たれば、悲しや體がみだれ同然、親の墓へさへ晝は得參らず、夜の中に寫して來た戒名、命日に坊樣呼ばうにも、宿なしなれば佛樣は猶なし、せめて親の大恩を忘れぬ樣に彫付けた、此腕がわしが佛壇。置所が惡さに手を合しては拜まれず、毎朝片一方の手で御禮を申しますはいの。餘所ながら聞けば御主人丈太夫樣、御切腹なされた元はといへば、紛失の吉光の刀、此大坂に質物に入つてある由、エ是を請戻してお家を立つれば、お主へ忠義、親父樣のお位牌へ、是に上こす手向はないと、思ひ立つた其日から、金の工面に樣々の騙事。日外座摩ですりかへた、其銀故に難儀さつしやる久松樣が、主人の若旦那であつたとは夢三寶、たつた今聞いて腸がひつくり返つた、拷的、目當の外れたも不幸の罰、母者人堪忍して下さりませ」と、眞實眞身の後悔は、昔に返る稚顏、「其氣になつたら親子ぢやもの、何の憎かろ、よう健で居て呉れたな」「母者人懷かしかつた」と抱付き、裲衵の袖を絞が誠、大づけ涙殊勝なり。「ヲ、親子の心底感心しました、夫程に二人の衆が心を盡す、吉光の守刀は爰にあるぞや」「エ、そりや又どうしてお前の御手に」「サア緣は不思議と、久松の人がら、由ある人と見た故に、尋ねて聞いた氏素姓、守刀の入譯、廻

り廻つて山家屋にあると聞出し、お染を望むを幸に、こつちから乞うて取つた結納の證。久松、そなたに是がやりたい計に、嫌ふ娘を山家屋へ、やらねばならぬも爰の譯。是を土産に本知に歸れば、和泉の御家中相良久松樣。いつまでも油屋の丁稚で居るが見目ではあるまい。まだ年の明かぬ中と、わしへの義理や何やかや、譯もない事思はずと、早う出世さしやんせ」と、渡す後家鞘ぬけめなき、情にお庄が忝なみだ、庄「腑甲斐ない我々が、思ひ込んだ念が屆いて、嬉しいとも有りがたいとも、久松樣、御禮を〳〵」「ア、是、禮は來年ゆるりと、マア行かしやんせ」「ホンニ母じや人、うか〳〵して居る所ぢやない。今夜の内に藏屋敷へお供して、お留守居へ御目見えなされずば、歸參の願が叶ふまい。サア〳〵〳〵若旦那、早う〳〵」に久松は、お染に引かるゝ亂髪、撫付ける間もせはしなく、突出す鐘は早夜半、時刻が移ると勘六が、先に押立てかけ出す足首、片息ながら取付く小助、投込むくゞり戸、「御家樣おさらば」「御無事で」「まめで」と内と外、隔つる一夜大年の、鐘は百八煩惱を、跡に見捨て　三重急ぎ行く。說教跡にむざんや油屋の、お染は一人娘氣に、思ひ詰めたる久松に、別るゝ樣子立聞に、聞いて氣もきえ胸せかれ、爰で添はれぬ緣ならば、未來で積る白雪の、庭へ泣く〳〵をりからに、「お染〳〵」と母のお勝が聲すれば、「アイ〳〵〳〵」と元の座敷へ立戻る。お勝はさあらぬ顏色にて、「あ

すは日出たい元日、年の終は寢ぬものぢやげな。譬へさうなうても、寺々の鐘の音で寢られぬから、持病の癪が差込んで、アイタ〳〵、ちつと爰を押へてたも」あいと娘は何氣なく、手を差入れる懐を、あけて夫とはいはた帶、障る手先にお染は恟り、「母樣、こりやお前腹帶ぢやないかいな」と、思ひがけなき興覺顏。「娘、そなた腹帶といふ物、して見やつた事があるか」「エイ、いえ〳〵何のマア、腹帶とやら、ついに見た事も無いけれど、お腹にやゝをやどした時、此樣に卷いて置く物ぢやと咄に聞いたばかり」「ヲヽよう知つて居やる。いかにもこりや腹帶、イヤサア、癪を押へる腹帶。此癪の直る藥をコレ見や、買うては置いたれど、下女にも男にも煎じてもらふ人がない。わがみ大儀ながらこの藥、誰も人の見ぬ樣に、こつそりと煎じてたも」「アノ母樣の何言はしやんす、藥上がるに誰に遠慮」「イヤ〳〵人に見せられぬ、こりや此癪を押下げるおろし藥」「エヽイ」「ヲヽ肝が潰れう。娘の手前も恥かしけれど、太右衛門殿に別れてから、後家は立てても離れて煩惱、嵐三右衛門の芝居に誘はれ、名は言はれぬが、美しい若衆形をふつと見てから、思ひ切るにも切られぬ惡緣、それが積つて情ない、ツイこんな癪になつたはいなう。かういうたら、定めてそなたの心では、母樣の未練らしい、わしらがそんな事が出來たら、井戸へなりと身を投げて死んで仕舞ふに、卑怯な命惜むとも思やらうが、夫では

わが身ばかりぢやない、世間へぱつと沙汰になつて、油屋の家は是限、わしも色香を知りながら、心に好かぬ山家屋へ、嫁入さすも家大切。今の若衆形の事ふつつり思ひとまつた證據に、おなかの癪をおろし藥、思ひ切つて煎じてたも。折角佛樣の御世話で、五月にもなつたもの、いぢらしけれど子を助ければ親が死ぬ、いひ替した男まで、生きて居ぬ氣を知つた故、三方四方を納めるは、コレそなたの思ひきり一つ。とはいふものの警にも、子よりも孫は可愛といふに、初孫に日の目も見せず、水になせとの胴欲を、敎へる母が心の中は、コレ鬼ぢやはいの鬼ぢやはいの。男の爲親の爲家相續の爲と思うて、氣に入らぬ嫁入してたも。コレ一生の賴みぢや」と、我子を拜む母親の、義理の腹帶しめ泣に、「いかにも嫁入致しませう」「ヲヽ出かしやつた出かしやつた〳〵、よう云うてたもつたなう。其替にどうぞして、早う飽かれて戻る樣に、わしや神佛を祈つて居る」と、粹な親程取りわけて、迫るせつなさ娘の心、互に思ひやるせなき、親子の誠ぞ道理なる。やゝ時移り久松は、も一度お染に暇乞、死ぬる覺悟に立戻り、塀の外面にありぞとも、知らずお勝は、「ヲヽ嬉しや〳〵、翌日は目出たい元日、泣顏ふいて神樣へ、何やかやお賴み申そ。サアおぢやいの」と、連れて行く。見越の枝に三尺帶、ひらりと内へ久松が、あはや人影見られじと、潛む暗き夜藏の戸の、あいたを幸そつと入る。跡からついて見濟す小

助、外から戸前をどつさりと、鼠落の仕濟し顔。折から外には小挑燈、雪の傘差かゝる鈴木彌忠太、後を慕うて勘六が、息もすたゝ、「彌忠太殿ゝ、一遍こなたを尋ねたはいの」「身共に何ぞ用があるか」「ある段か〳〵。こなたが盗んで立退いた吉光の守刀、質屋にあつて手に入つた故、たつた今藏屋敷へ持つて往た處が、眞赤な贋物、正眞はこなたが持つて居よう。サア尋常に出した〳〵」「ハヽヽヽ、いかにも推量の通り、質屋めに一杯食はしたのぢや。正眞はおれが持つて往て、立身の種にする、溫に渡してよいものか」「夫聞いたらまうよい。其刀は大かた爰に」と、柄にかける手をもぎ放し、直にすらりと抜打を、傘でぱつしり請身の手だれ。内は妹脊の緣側より、庭の井筒に合掌し、「南無阿彌陀佛」の聲聞取り、「お染樣か」「ヤア久松か」「どうでも死なねばならぬ身の上」「未來は一所に」手に手を取つて、組合ふ外の暗紛れ、手に障つたる小脇差、探つて見れば九寸五分。「扨こそ吉光」「夫やつては」とむしやぶり付くを踏飛し、勘「エヽ忝い。武運の花の開き時、久松樣は何所にござる」と、夫としら雪白壁の藏と庭とになむあみだ、アツト苦しむ一聲に、驚くお勝、久三の小助、「久松めはくたばつた」と、呼はり出づるを取つて引敷き、「エヽ早まつた御最期」と、恨むに甲斐も百八の、鐘も打切りしら〳〵明け、かはいの聲と諸共に、年のをはりに明渡る、春を重ねて久松が、名は大阪の東

堀、今に傳へて殘りける。

新版歌祭文終